



(日文版)

丰子恺译

日本古典文学翻译研究

平安朝物語の中国語訳に関する研究

—先駆者としての豊子愷の訳業について—

徐迎春◎著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

当代外语
研究论丛
FOREIGN
LANGUAGES
STUDIES
外国文学研究系列

(日文版)

丰子恺译

日本古典文学翻译研究

平安朝物語の中国語訳に関する研究

—先駆者としての豊子愷の訳業について—

徐迎春◎著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



内容简介

本书参考了大量中日文古今资料,对丰子恺翻译的《源氏物语》、《伊势物语》、《竹取物语》、《落窪物语》等四部日本古典文学作品的翻译过程作了详尽论述,更对与他人译著相关的内容进行对比,详尽论述了丰子恺作为古典文学翻译的先驱者在翻译方法上的长处和短处,凸显了先驱者对翻译文学的贡献。本书具有一定的学术价值,适合日语专业师生和从事翻译研究的人员使用。

图书在版编目(CIP)数据

丰子恺译日本古典文学翻译研究:日文/徐迎春著.

—上海:上海交通大学出版社,2015

ISBN 978-7-313-14023-4

I. ①丰… II. ①徐… III. ①日本文学-古典文学-文学翻译-研究-日文 IV. ①I313.062

中国版本图书馆CIP数据核字(2015)第257518号

丰子恺译日本古典文学翻译研究(日文版)

著 著:徐迎春

出版发行:上海交通大学出版社

邮政编码:200030

出版人:韩建民

印刷:虎彩印艺股份有限公司

开 本:710mm×1000mm 1/16

字 数:239千字

版 次:2015年11月第1版

书 号:ISBN 978-7-313-14023-4/I

定 价:38.00元

地 址:上海市番禺路951号

电 话:021-64071208

经 销:全国新华书店

印 张:13.75

印 次:2015年11月第1次印刷

版权所有 侵权必究

告 读 者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话:0769-85252189

序文

本書の著者、徐迎春氏は、日本古典文学の研究のため、2000年から福岡教育大学の工藤重矩教授の下に留学し、大学院修士課程を終えた後、2005年から九州大学人文科学研究院の博士課程で研究を続行させ、2010年に博士（文学）の学位を得た、篤学の士である。

初め、氏は平安時代の女流作品『枕草子』を対象に、日本人研究者も顔負けの緻密な考証に取り組んでいたが、氏の熱意と緻密な分析力にもかかわらず、『枕草子』という作品のテキストの不備もあつて、万人を納得させる結論には一歩及ばなかったと記憶している。

九州大学での最初の指導教員であつた私は、氏に対し、中国人研究者として日本人にはできないテーマでの研究を示唆したところ、氏はつとに『源氏物語』の中国語訳として有名な豊子愷の『源氏物語』中国語訳の研究に取り組み、豊子愷の拠つた資料を突き止めるなど、貴重な発見を重ねるに至つた。

外国人による『源氏物語』の外国語訳は世界30数カ国語に及んでいるが、その訳者たちのすべてが、1000年前の『源氏物語』原文だけから訳しているわけではない。原文は見ているとしても、多くは日本の近代の注釈書や現代語訳を参考になっている。豊子愷先生の場合も例外ではなく、その翻訳作業の実態が徐迎春氏の周到な追跡によつて解明されることとなつた。

指導教員であった私は、2009年に九州大学を辞し、東京の国文学研究資料館に転じたが、その後は、辛島正雄教授の指導により、研究対象を同じく豊子愷の中国語訳『伊勢物語』やその他の作品に広げ、博士論文として、堂々の完成を見た。博士論文の審査に当たられた辛島教授の労を多とするとともに、その博士論文の出版を祝して一言する次第である。

国文学研究資料館長 今西祐一郎

2015年6月

前言

本书是我的博士论文。主要写了丰子恺翻译日本平安时代(794-1192)的《竹取物语》《伊势物语》《源氏物语》《落窪物语》等四部物语作品时参考的文献资料。本书为了解和研究丰子恺先生的日本古典文学作品的翻译提供了最基础的材料,在此对不是以完整的形式展示给读者以及相关领域的同仁,表示抱歉。

研究没有止境,希望在拙著出版之后能得到更多同仁的理解和支持,如果能得到大家的宝贵意见,将不甚感激。

本书能够得以出版,首先要感激的是日本的今西祐一郎老师、工藤重矩老师、辛岛正雄老师等三位导师。他们教会了我做学问的方法,更重要的是从他们身上我学会了做人的道理。因此,回国之后能够静下心来来工作和学习、生活。另外还感谢高山伦明老师、川平敏文老师、青木博史老师等研究室的老师。其实在九州大学国语国文学系作为一名外国留学生学习我感到非常有压力。因为,我在研究室的时候留学生很少,这也说明研究室的导师非常严厉!今西老师是我考上九州大学时的第一任导师,但是直到老师退休时我连一篇论文也没有公开发表!这时我在日本已经七八年了!等今西老师退休之后辛岛老师是我的导师了。所以,每当想起博士论文以及在日本的事情,很难用一句话来说出自己的感受!我想我能够坚持下来获得博士学位应该感谢研究室的各位老师的不鼓励,还有国语国文学系的每一位学生。尤其是田村隆前辈就像我的小老师,不管问他什么问题,他都会耐心地指导。这位小老师现在已经是东京大学的一名教师了!

最后我要感谢上海海洋大学外国语学院齐亚丽院长以及系里的老师包括校领导在拙著出书之际给予本人的支持和帮助。在此,深表谢意!

另外,我还要加一句。本人的博士论文审核通过是在2010年10月,也就是说本人是在2010年10月正式获得了

九州大学的博士学位。之后本人的博士论文中有关《源氏物语》的论文成果成功申请到了日本「住友财团日本关联研究」的资助。《竹取物语》和《落窪物语》相关的论文分别被日本著名的杂志《日本语论说资料》和《中国关系论说资料》重新收录。《伊势物语》有关的论文被《日语学习与研究》录用。记得今西老师提前退休到东京的国文学资料馆工作之后，仍然会在周末到研究室给我指导论文，并且，每次拿到他给我修改过的论文，看到的都是他用红色圆珠笔修改过的字迹，我写的东西全都看不清楚了！每次都是压力、感动！这些修改稿在我回国的时候被我带回国，现在放在我的书架上。每当我拿起它们都会感慨万分！谢谢今西老师！

徐迎春

2015年9月20日于上海

目次

序論	一
一 豊子愷研究の現況	一
二 本論文の目的と構成	一六
第一章 豊子愷訳『源氏物語』について	二四
一 『源氏物語』を翻訳した経緯	二四
二 豊訳『源氏』の脚注	二八
三 『原稿』の訳文に見られる書き入れ	四三
四 『原稿』の脚注に見られる書き入れ	五四
五 他の中国語訳との比較	六五
第二章 豊子愷訳『伊勢物語』について	八六
一 執筆時期及び契機	八六
二 豊子愷記念館所蔵『王朝物語集』(二)について	八九
三 章段分けについて	九四
四 特異な訳文	一〇〇

五 脚注について	一〇九
----------------	-----

第三章 豊子愷訳『竹取物語』について	一二二
--------------------------	-----

一 豊子愷記念館所蔵『竹取物語』の訳稿	一二二
---------------------------	-----

二 特異な訳文	一三三
---------------	-----

三 措辞の選択及び外国語訳の限界	一三九
------------------------	-----

第四章 豊子愷訳『落窪物語』について	一四九
--------------------------	-----

一 特異な訳文	一四九
---------------	-----

二 省略と誤訳について	一五六
-------------------	-----

三 『小島訳』に従わなかった訳	一六六
-----------------------	-----

四 訳語の選択	一七一
---------------	-----

結 論	一八四
-----------	-----

初出一覧	二〇〇
------------	-----

参考文献	二〇二
------------	-----

索引	二〇四
----------	-----

あとがき	二一〇
------------	-----

序論

一 豊子愷研究の現況

本論文は中国の豊子愷（一八九八—一九七五）によってなされた平安朝文学の翻訳について論ずるものである。本論文に先立ち、まず豊子愷その人及び研究状況について簡単に紹介する。

豊子愷は中国の近現代を代表する多才多能な知識人である。

豊子愷が日本で初めて紹介されたのは随筆家としてである。それは一九四〇年に創元社から出版された吉川幸次郎（一九〇四—一九八〇）による豊子愷『縁縁堂随筆』（注）の日本語訳によつてであつた。吉川幸次郎は該書の「訳者の言葉」において次のように評する。

著者豊子愷を、私は現代支那における最も芸術家らしい芸術家だと思ふ。それは氏が多才多藝であつて、ピアノをひき、漫画を描き、随筆に工たくみだからではない。私は著者のいかにも芸術家らしい真率さを、万物に対する豊かな愛を、更にまたその氣品を、氣骨を、愛するからである。

また、谷崎潤一郎（一八八六—一九六五）は、吉川幸次郎訳『縁縁堂随筆』を読んだ後、「きのふけふ」（注②）において、吉川幸次郎が言う「芸術家」らしい風韻について次のように具体的に語っている。

此の随筆はたしかに芸術家の書いたものだと言ふことが出来る。別に為めになることやむづかしいことなどを取り上げてゐるのではないが、ほんのちよつとした詰まらないことを書いても、此の人の筆にかゝると忽ち一種の風韻を帯びて来るところは不思議である。（中略）就中私は、「西瓜の種を食べること」と云ふ巻頭的一篇十五頁ほどのものだけでも、多くの人人に是非読んでみることをすすめたい。何となれば、こんなに支那的で、こんなに下らないことを、こんなに面白く書いてある点は、正に随筆の上乗と云へるからである。（吉川氏の訳文もまたなかくすぐれてゐる）おそらくこれなどは最も得意の一篇なのであらうが、著者の境地は決してかう云ふ方面にばかりあるのではなく、各篇各様の味を出してゐるので、私は次には「山中の雨宿り」と云ふのを好む。

吉川幸次郎と谷崎潤一郎は共に、豊子愷の平凡なものを芸術家特有の筆で描いた点に注目している。それではこのように、豊子愷が平凡な、日常的な、ものを面白く書けるようになったきっかけは何であろうか。まず、豊子愷「音楽と文学の握手」（注③）から窺ってみよう。

我近来的画，形式是白纸上的墨画，题材则多取平日所讽咏的古人的诗句词句。因而所作的画，不专重画面的形式的美，而宁求题材的诗趣，即内容的美。后来摹日本竹久梦二的画法，也描写日常生活的意味。

【最近私の絵は、形式は白紙の墨絵で、題材は古人が日頃詠んだ詩詞から取ったものが多い。ゆえに、描いた絵は、専ら

形式の美を重んじてはいなかった。題材の詩趣をも重んじていた。即ち、内容の美である。しかし、日本の竹久夢二の画法を模倣してからは日常生活をも画くようになった。】

（〇）の日本語訳は筆者による。以下、同じ）

豊子愷が言う「墨絵」は中国の国画であり、それは「詩詞」を題材とする内容を形式より重んじる画である。所謂古典を題材とする画である。それが日本留学の時、竹久夢二（一八八四—一九三四）の絵に接してからは日常的なものを描くようになったと豊子愷は述べているが、これは内容は無視し、ひたすら形式を重視するようになったということではない。内容を重んじる豊子愷の画風は変わらなかった。これについては後述する。

豊子愷をして日常的なものに関心を向けさせるようになった要因は前述の日本留学の時に出会った竹久夢二の絵であったが、このような豊子愷の画風における転換は彼の文筆活動にも現れた。即ち、随筆の特色で、吉川幸次郎が言う「万物に対する豊かな愛」、更に、谷崎潤一郎が言う「西瓜の種を食べることと云ふ巻頭的一篇十五頁ほどのものだけでも、多くの人人に是非読んでみることをすすめたい。何となれば、こんなに支那的で、こんなに下らないことを、こんなに面白く書いてある点」からも窺えることであろう。

豊子愷の漫画と随筆について、中国の著名な作家であり、また教育家である葉聖陶（一八九四—一九八八）は『豊子愷文集』（注々）の序において、次のように述べている。

子愷兄的散文的风格跟他的漫画十分相似，或者竟可以说是同一的事物，只是表现的方式不同罢了，散文利用语言文字，漫画利用线条色彩。

【子愷兄さんの随筆の作風は漫画ととても似ている。あるいは同一のものとも見なせる。ただ、表現方法に違いが見られ

るだけだ。随筆は言語と文字を表現手法とする。それに対して、漫画は線と色彩を用いる。】

この点、豊子愷本人は「漫画の意義」（注5）において次のように語っている。

漫画这个「漫」字，同「漫笔」「漫谈」等的「漫」字用意同。漫笔、漫谈，在文体中便是一种随笔或小品文，大都随意取材，篇幅短小，而内容精粹。漫画在画体中也可说是一种随笔或小品画，也正是随意取材，画幅短小，而内容精粹的一种绘画。

【漫画の「漫」は、「漫筆」・「漫談」の「漫」と意味が同じである。漫筆・漫談は文体から言えば、随筆、あるいは小品文の一種と言える。それは随意に取材したものであり、文章は短いながら内容は精粹をなすものである。漫画も画のなかでは、漫筆、あるいは小品画とも称することが出来る。随筆と同様に随意に取材し、画面は小さいながら内容は精粹をなす絵の一種である。】

このように、豊子愷は日本の竹久夢二の絵の影響を受けて日常的なものに関心を持つようになったが、それは自ずと彼の随筆の特徴にも現れた。実際、豊子愷の芸術的生涯を通して日本の存在は無視できないものがある。その影響は、漫画、随筆に止まらない。

豊子愷は一九一四年に中国に最初に設立された六大師範学校の一校である浙江省立第一師範学校に入学する。そこで、中国文学を有名な文学者である夏丐尊（一八八六—一九四六）と、美術と音楽を中国の近代芸術の先駆者である李叔同（一八八〇—一九四二）に師事する。浙江省立第一師範学校で学んだ五年間は、豊子愷にとって以後の文筆活動と芸術的生涯の基礎を固めた時期でもあった。

一九一九年に卒業した豊子愷は、友人と上海専科師範学校を設立し、そこで西洋画を教えるようになった。当時、

西洋画を宣伝する機関が増えつつある中、特に上海のある本屋から買った日本の美術雑誌によって、豊子愷は西洋画界についての状況と日本の美術界の盛況を窺い知った。豊子愷は「わたしの苦学の経験」（注⑨）において、自分を「半熟の橘」に喩えていた。そこで豊子愷は、家庭状況が許さなかったにも関わらず、芸術向上の為、一九二一年の春に日本へと旅立った。

大野公賀は「豊子愷における自己確立のための模索——浙江省立第一師範から東京留学まで」（注⑩）において、次のように述べていた。

また清末から民初にかけて西洋芸術の先駆的存在であった李叔同が、西洋的価値観に失望し中国の伝統的価値観へと、その指向を転換していくのに対し、豊子愷は李叔同の東洋的価値観に基づいた芸術思想の影響を受けつつも、五四「新青年」として西洋芸術や文化を積極的に受容していく。その後、豊は日本に留学し、西洋画でも中国画でもない竹久夢二の絵にふれ、自らも「子愷漫画」と称される叙情画を描くようになる。それは豊子愷にとって東洋的価値観の再評価ならびに再発見を意味していた。

豊子愷が日本で「西洋画でも中国画でもない竹久夢二の絵」に出会って、「子愷漫画」を形成したと述べている。その「子愷漫画」によって、豊子愷は中国では「漫画の鼻祖」と呼ばれるようになった。日本では竹久夢二の絵は其程人々に好まれていなかったが、竹久夢二の影響を受けた豊子愷の漫画は中国の民国期（一九二一—一九四九）を魅了した漫画でもあった。

それでは、この「西洋画でも中国画でもない」とは、何を指すものであろうか。そこで、竹久夢二の画についての豊子愷の評を「日本の漫画を談じる」（注⑪）から窺ってみよう。以下、その一部を掲げる。

他的画风，融化东西洋画法于一炉。其构图是西洋的，画趣是东洋的。其形体是西洋的。其笔法是东洋的。自来总合东西洋画法，无如梦二先生之调和者。他还有一点更大的特色，是画中诗趣的丰富。以前的漫画家，差不多全以诙谐滑稽，讽刺，游戏为主题。梦二则屏除此种趣味而专写深沉严肃的人生滋味。使人看了概念人生，抽发遐想。故他的画实在不能概称为漫画，真可称为「无声之诗」呢。

【彼の画風は東西の画法を一体に融合したものである。構図は西洋的で、画趣は東洋的である。その形体は西洋的で、筆致は東洋的である。東西融合の画法を夢二先生ほどに調和させた人はいなかった。そのもつともの特徴と言えば、絵が詩趣に富んでいることである。日本の昔の漫画家はそのほとんどは滑稽、風刺、面白みを主題とした。それに対して、竹久夢二はそれらから離れて、専ら重苦しく、厳しい人生を描いた。それは見る人をして人生を慨嘆し、さまざまに思いを馳せるようにする。ゆえに彼の絵は、正に一概に漫画とは言えない。「無言の詩」である。】

大野公賀が言う「西洋画でも中国画でもない竹久夢二の絵」とは、右掲の豊子愷が言う「東西の画法を一体に融合したもの（融化东西洋画法于一炉）であろう。即ち、「構図は西洋的で、画趣は東洋的である。その形体は西洋的で、筆法は東洋的である」の特徴を指していると思われるが、その具体的な内容は何であろうか。

豊子愷は西洋画の勉強のために日本（東京）に留学した。しかし、自身の境遇では西洋画家になるのはなかなか難しいと痛感したあまり、東京に着いた当初は午前中はある洋画学校に通ったが、だんだん通わなくなり、最後は浅草のオペラ座、神田の古本屋を回ったと、『子愷漫画』の序（注⑥）において述べている。そして、神田の古本屋で出会ったのが『夢二画集 春の巻』であったと、豊子愷は「絵と文学」（注⑦）において述べている。豊子愷は「春の巻」に続く巻を買うつもりであったが、見付からずそのまま帰国してしまった。その後、友人に頼んで



(図1)

「春の巻」に続く「夏の巻」「秋の巻」「冬の巻」などの三冊と、更に『京人形』と『夢二画手本』をも購入できた。豊子愷が「絵と文学」を書いたのは一九三四年であったが、その時、豊子愷は『夢二画集』を無くしていた。ゆえに「絵と文学」は、豊子愷が記憶を辿りながら書いたものである。そこには、豊子愷が竹久の絵について、絵解きを行う場面があるが、その一部を以下掲げることによって、豊子愷が言う竹久の「東西融合」の画法とは、どのようなものであったかを、窺ってみよう。

记得有一幅，画着一片广漠荒凉的旷野，中有一条小径迤邐地通到远处。画的主位里描着一个中年以上的男子的背影，他穿着一身工人的衣服，肩头上打着一个大补丁，手里提一个包，伛偻身体，急急忙忙地在路上向远处走去。路的远处有一间小小的茅屋，其下半部已沉没在地平线底下，只有屋顶露出。屋旁有一株被野风吹得半仆了的树，屋与树一共只费数笔。这辛苦的行人，辽阔的旷野，长长的路，高高的地平线，以及地平线上寥寥数笔的远景，一齐强烈地表现出一种寂寞冷酷的气象。画的下面用毛笔题着一行英文：‘To His Sweet Home (回可爱的家)’，笔致朴雅有如北魏体，成了画面有机的一部分而融合于画中。由这画题可以想见那寥寥数笔的茅屋

是这行人的家，家中有他的妻、子、女，也许还有父、母，在那里等候他的归家。他手中提着的一包，大约是用他的劳力换来的食物或用品，是他的家人所盼待的东西，是造成 sweet home（可爱的家）的一种要素。现在他正提着这种要素，怀着满腔的希望而奔向那寥寥数笔的茅屋里去。这种温暖的盼待与希望，得了这寂聊冷酷的环境的衬托，即愈加显示其温暖，使人看了感动。

（文中の傍線は筆者による。以下、同じ）

【記憶にある一つの絵は広々とした野原に、うねうねと一本の小道が遠くへ続いている。画面のメインは中年を過ぎた男性の後姿であった。彼は労働服を着ている。肩には大きな縫い目が見える。手には布袋を持っている。腰を屈めながら遠くへ早足で歩いていく。道の遠くには一つ的小屋がある。その下半分は既に地平線に隠されて、屋上しか見えない。小屋の近くには野風に吹かれて半分倒れかかっている一本の木があるが、小屋と木はただ簡単な線で完成されている。疲れているこの人、広々とした野原、長い道、高い地平線、及び地平線上に何本かの線によつて描かれた遠景、これらすべては、一種の寂しく、また冷酷な景色を力強く表現している。絵の下には、毛筆による英文が一行書かれてある：To His Sweet Home [暖かい家に帰る]。その筆致は、素朴で優雅なもので、北魏体を髣髴させる。字は画面の有機的な一部分として絵の中に溶け込まれている。この画題から、あのラフスケッチで描かれた小屋は、道を歩く人の家だと想像できる。その家には、彼の妻、息子、娘、あるいは父と母も彼の帰ってくるのを待っているかもしれない。彼の手提げの布袋には、おそらく労働によつて取得した食べ物か、あるいは日用品が入っているかもしれないが、これらは彼の家族が待っているものである。また、それはこの sweet home [暖かい家] を構成する要素の一つでもあろう。彼は今その要素を手を持ち、かつ、希望をいっぱい持って、そのスケッチした小屋に向かっていく。その暖かい待ちと希望は、その背景になっている寂寥で、冷酷な環境によつて、更に際立たせられ、その暖かさが一層感じられ、見る人をして感動を禁じ得ない。】